

Title	ハーディの短篇小説にみられるエロチシズム
Author(s)	植苗, 勝弘
Citation	Osaka Literary Review. 19 P.82-P.91
Issue Date	1980-11-30
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25589
DOI	10.18910/25589
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ハーディの短篇小説にみられるエロチシズム¹⁾

植 苗 勝 弘

1

いわゆる 'erotic scene' なるものは Hardy の長篇小説の中にも散見する (例えば *Tess of the d'Urbervilles*)。しかし eroticism がテーマと深いかわりを持った、あるいは eroticism がテーマを強力に支えている、そんな長篇小説は Hardy にはない。では短篇小説は如何か。本稿においては eroticism が作品のテーマと緊密に結び付いていると思われる Hardy の短篇小説を取り上げその解説を試みたい。²⁾ 対象となるのは *Life's Little Ironies* の中に収められている 'On the Western Circuit' (1891年), 'An Imaginative Woman' (1893年), 'The Fiddler of the Reels' (1893年) である。³⁾

2

'On the Western Circuit' の主人公 Charles Raye は stuff-gownsmen という固い職業についてはいるが世紀末のデカダンスに身を浸す 'sensual' な青年である。⁴⁾ Anna と短期間のうちに親密な間柄になるがそれもいつときの欲情 'a passing desire' に駆られたからにすぎない。このような青年に一目惚れする Edith Harnham は30才の人妻で、自分の結婚を失敗だと認めており、夫との仲も冷めきっていて子供もない。教養は必ずしも低くはないが裕福な暮らしをしているいわば有閑マダムである。彼女が実際に Charles に逢うのは物語の最初と最後の二度だけである。最初逢った時彼女はたちまち彼に魅かれてしまうが、彼女を魅了したものは、まず彼の風貌・声そして頬に感じた彼の息づかい、さらに彼が彼女の手を Anna の手と間違えて大胆に愛撫したという極めて感覚的なものばかりである。⁵⁾ この最初の出逢いの後二人の交流は文通の形をとるが、それはあくまで

Anna の代筆であり、Charles は文通の相手が Edith であることを知らない。かたや Edith は Charles が事情を知らないことを利用して、彼に対する思いの丈を書き綴る。結婚生活を経験しているにも拘わらず女性としての本性を未だかきたてられたことのない彼女⁶⁾にとってこの文通は恰好の情熱の吐け口となる。しかし彼女の憶えている Charles は精神的なものの全くない感覚的な存在としての Charles でしかない。初めは単なる恋人として恋文を代筆し、Anna の懐妊の告白を聞いてからは、Charles の子供を宿した女として彼に手紙を書く。そしてこの行為は彼女に 'luxury' を与えるに至る⁷⁾のであるが、ここで得た彼女の 'luxury' とはいったい何であったか。それは所詮相手に知られないのを幸いに、Charles を架空の親密な恋人に仕立てあげて間接的な官能の悦びに浸る有閑マダムの、淫靡にして自慰的な行為にすぎなかったのではないか。したがって Charles が真剣に Anna を愛し始め、彼女との結婚を決意した時 Edith の「官能の遊戯」は崩壊し始める。何故ならば Edith の楽しんでた 'luxury' は現実の裏打ちの全くない 'fancy' の世界であったからである。このあたりまでくると読者もこの物語の筋立てに無理のあることに気付かざるをえないのであるが、それはさておき、Charles が一部始終を知った時彼は Edith に彼女の頬か唇かどちらかにくちづけをさせるよう迫る。彼女は手紙の内容は全て自分の真意であったことの証しとして彼に唇を与える。⁸⁾かくて Edith の「官能の遊戯」は終る。つまりこの物語は有閑マダムの自慰的行為が興味の中心で、筋立てに少し工夫があるとはいってももののまた無理もあり、Edith の描写も 'flat' で彼女の夫には便宜的な役割しか与えられておらず、文学作品として上出来とは言いがたいが、Hardy の作品の中では eroticism が最も露骨に現れているものではないかと思われる。

3

'An Imaginative Woman' は 'On the Western Circuit' の2年後に書かれたが、前作品ほど濃厚にまた表面に eroticism が現れている訳ではない。

別言するならばこの作品の方が eroticism の芸術的処理がより高度であると言える。その理由は、この作品においては spirituality と eroticism あるいは sensuality とが混然一体となっているからである。例えばこの物語も前作品と同じく女主人公 Ella Marchmill が、ほとんど imagination の中で詩人 Robert Trewe と交流し、限りなく一体化しようとする過程（そして彼女は終生彼に逢うことはない）が興味を中心であるが、果してそれは Ella の単なる Platonic love であろうか。もしそうだとすればこの作品は人妻の文学少女趣味を描いたものにすぎないということになる。Ella は30才、裕福な商人の夫との間に3人の子供をなしながら、Edith 同様自分の結婚を失敗と認め、現実から imagination の世界に逃避して生きている女性である。⁹⁾ ただ Ella が Edith と異なる処は、Ella が ‘a votary of the muse’¹⁰⁾ であり、自らも詩を作り詩を通して Robert を知るということである。物語は Marchmill 一家が避暑に来てたまたまこの詩人の部屋を Edith が借りる処から本筋に入るが、このあたりからすでに spirituality と sensuality とが混然となっているこの物語の特徴が出てくる。詩人のレインコートを着た Ella は、‘the mantle of Elijah’ とさげび、¹¹⁾ 詩人の心臓の鼓動が聞こえ、彼の頭能の働きが自分にのりうつったように感じる。即ちこれが Ella と Robert との一体化の第一歩である。さらに Ella が Robert の写真を初めて眺める時の、あの常軌を逸したとも思われる念入りな準備、これは明らかに Platonic love の領域を越えている。

To gratify her passionate curiosity she now made her preparations, first getting rid of superfluous garments and putting on her dressing-gown, then arranging a chair in front of the table and reading several pages of Trewe’s *tenderest utterances*. (p. 16)

上記引用文中の ‘tenderest utterances’ は understatement であり、Trewe の詩に対する友人の評、

‘... His poetry is rather too erotic and passionate, you know, for some tastes...’ (p.23)

と考え併せるとこの句は、‘the most erotic and most passionate utterances’と解釈することが可能であり、さればこの場面はますます eroticism 濃厚なものとなる。この後 Ella は詩人が寝ていたベッドに横たわり、壁に残された彼の鉛筆の走り書きを手でなぞりながら詩人に思いを馳せ、ついには自分が詩人の唇の上で眠り、詩人の精神が全身にエーテルのように浸みわたるのを覚えるに至る。¹²⁾ここいおいて Ella はついに実際の行為と imagination とでもって、spiritual な意味においても sensual な意味においても詩人 Robert との一体化を果すのである。

もしこの物語が Ella のいまはのきはの告白の処¹³⁾で終わっていたら Ella の恋が Platonic love であったと考えることも可能かも知れない。しかし Hardy は、Ella の死因ともなった 4 人目の子供が詩人 Robert と瓜二つであったと書き足し、Ella と Robert とがいはば霊的交合をとげたことを暗示し、imagination の中でのものであったとは言え Ella の愛が単なる Platonic love でなかったことを示している。ただこの作品が‘On the Western Circuit’のように女主人公の「官能の遊戯」の描写だけに墮していないのは、Ella が詩人としての Robert に憧憬を抱いている面と彼を若い異性として恋慕している面とがバランスよく描かれており、Ella の行動と心理との描写が克明であり、夫 William にも Edith の夫とは違って相応の存在感があり、したがって‘On the Western Circuit’に較べ物語全体がより説得的で reality があるからである。そしてその reality を強力に支えているのが eroticism である、という意味でこの短篇は eroticism の芸術的昇華に成功した作品であるといえることができる。

4

上記二篇には、具体的に sensual な人物、具体的に sensual な場面があったが、次にとりあげる‘The Fiddler of the Reels’にはこういう人物・場面がいっさいない。したがってこの作品は eroticism とは全く関係のない、たんに「バイオリンの魔力」を描いた作品のようにもとれる。しかも

しそうだとしたらその魔力の対象がことさら、乙女の Car'line でありまた人妻の Car'line であらねばならぬ必然性はないし、Wat Ollamoore が他の女性に逢いに行くことに Car'line が腹を立てる理由もないし、彼の足音を聞いただけで Car'line が興奮してとび上るということも説明がつかない。またこの作品は 'An Imaginative Woman' と同年に書かれてはいるが、'An Imaginative Woman' の克明な人物描写に較べ、主人公 2 人の描写はスケッチ風、それも外面的スケッチにとどまり、彼等の心理は読者には全くわからない。またこの物語は Great Exhibition 開催 (1851年) を契機として鉄道が開通したロンドンとウェセックスとが舞台になっているがこれらもあくまで背景であってテーマとはなりえない。この短篇に託した Hardy の意図は別の角度から検討されねばならないように思われる。

まず fiddler の Wat Ollamoore であるが、彼の出所は明らかでなく Mop というあだ名がつくほど豊かな黒髪を肩まで垂らしさらにその頭の上に二重鉢巻のような巻き毛を付け、肌はオリーブ色といった風で、およそ 'un-English', 東洋風あるいは pagan な雰囲気を漂わせている。¹⁴⁾ 彼はまた教会とは全く縁のない存在で、当時正統とされた教会音楽には関心がなく、彼の奏でる曲は昔から田舎に伝わるダンス音楽だけである。さらに彼の奏でるバイオリンについて、自分自身 fiddler であった Hardy は言葉を尽してその魅力を語るが、それはオルフェウスの琴の如き平和な魅力ではなく悪魔のそれである。とくにその音色は純心無垢のまた感受性の強い女性の心をかき乱さずにはおかない。そしてこのバイオリンの虜になるのが Car'line である。彼女について Hardy は、可愛くて魅力的な娘だが感受性が強いあまり時々それが高じてヒステリーを起す、と説明するに止めている。

さてこの Car'line が Wat のバイオリンに魅了される過程が極めて興味深い。しかし彼女は最初から無抵抗に喜々として彼のバイオリンを受けられる訳ではない。何か恐いものを感じてはじめはその音色を聞かまいとする。しかしいつしかその調べに魅せられて踊り出したい衝動に駆られる。やっとのことで彼のバイオリンから逃れて帰宅したものその後数時間は

興奮が冷めなかった。これが Car'line と Wat との最初の出逢いである。それからというものは彼女は Wat がダンスパーティでバイオリンをひくと聞けば数マイルの道のりもいとわず出かけて行く。さらに彼の足音まで聞き分けられるようになり彼が他の女性に逢いに行く足音を聞いただけで嫉妬のあまりヒステリー状態になってしまい周囲の者を驚かせる。彼女には真面目な婚約者 Ned がいたのだが Wat の出現以来すでに Ned は彼女の眼中にはない。ついに彼女は周囲の反対をふり切って Wat のもとに走ってしまう。読者がふたたび Car'line に接するのは4年後のロンドンであるがこの間に彼女は Wat の子供を産み、Wat に捨てられてしまっている。Ned は憐憫から Car'line と連れ子 Carry を引きとり、3人はロンドンで生活を始める。しかしやがて Great Exhibition 後の不況で Ned は失職し3人は故郷へ帰る決心をする。この間 Wat は Car'line の前に一度も姿を現わさない。Wat が現れない限り彼女は良き妻として Ned に尽し、二人と子供の生活の平和は保たれる。ところが一家が故郷へ帰ったその夜、Car'line が Carry を連れてとある宿屋へ入りそこで Wat を目撃し、彼のバイオリンを聞くやたちまち事態は一変する。Wat に捨てられて数年が経つというのに、また怨み重なる Wat である筈なのに、彼のバイオリンにたちまち彼女はロンドン暮らしの誇りも捨てて魅きいれられてしまう。¹⁵⁾ Wat との最初の出逢いでもそうであったように、この場面でも彼女は彼のバイオリンにはじめは激しく抵抗もし、演奏を止めてくれるよう心の中で哀訴嘆願もして何とかバイオリンから逃れようとする。しかしそれも果さずいつの間にかダンスの群れに加わり踊り出す。ついには抵抗心も失ってしまって自暴自棄となり Wat のバイオリンに操られるまゝ、独り踊り狂う。気がついた時には Wat と Carry の姿はない。怒り狂って Wat と娘を追う Ned とは対照的に、Car'line には Wat に怨みを抱いている節が全く見られない。

このようにみえてくと Wat と Car'line とをこれほどまでに強力に結び付けているものはバイオリンそのものではなくバイオリンに象徴される何物かであらねば説明がつかない。私は、この作品でバイオリンによって象

徴されているものは、理性の外にありしかも男女の間に‘magnetism’¹⁶⁾として働いている「性的魔力」ではないかと考える。こう考えれば Car’line が初めて Wat に出逢った時彼のバイオリンに魅かれながらも抗ったのは彼女の virginity の為せる業であろうし、またいちど魅きつけられてしまっただけからというものとは牧師である父親の諫言にも婚約者 Ned の熱心な求愛にも耳をかさず Wat に夢中になるのもこの魔力のせいであろうし、Wat が他の女性に逢いに行くと知ってヒステリーをおこすのは文字通り嫉妬ゆえであろうし、Wat の現れない平和なロンドン生活の後数年ぶりに聞いた彼のバイオリンにはじめ強く抵抗するのは、夫 Ned に対する chastity ゆえであろう。しかしついには Wat と二人きりになって彼のバイオリンに操られて踊り狂い陶酔の余り床に倒れてしまう、折しもバイオリンは妖精のかん高い叫びのような音を出して鳴るのをやめるといふくだりは性的恍惚以外の何物でもない。¹⁷⁾この後 Ned が半狂乱になって奪われた子供を探し廻るのに較べ、Wat を恨むでもなくまた娘のことを心配するでもない Car’line の恬淡とした態度は、この「性的魔力」に彼女が完全に呪縛されてしまっていることを示している。また Wat の ‘un-English’ にして pagan な characterization はこの短篇執筆当時のイギリス社会に対する Hardy の配慮か、それとも「性的魔力」の神秘性を高める工夫かのいずれかであろう。¹⁸⁾

5

本稿でとり上げた3つの短篇を書くにあたって Hardy が eroticism を意識していたかどうかは分からない。しかし少なくとも後半の作品 *Jude the Obscure* (1896年) にみられるような sex に対する根源的な問題意識を Hardy が持っていたとは思われない。したがって本稿では、あくまで作品に現れた eroticism がその作品の中でいかなる機能を与えられいかに処理されているかに絞って考察した。‘On the Western Circuit’ においては、平板な性格描写と無理な筋立てのために eroticism が通俗小説的に処理された。しかしこれと似通った構造を持つ ‘An Imaginative Woman’ では、

過不足のない人物・物語描写の中に eroticism が溶け込み、eroticism の存在が作品の reality を支える結果となった。さらに 'The Fiddler of the Reels' では、eroticism は象徴的な形で物語の中に組み込まれ、ドラマチックな筋の運びとあいまってその芸術的効果を如何なく発揮したのである。

注

1. 本稿は昭和54年11月10・11日岡山大学で催された日本ハーディ協会第22回大会で口頭発表した原稿を補正加筆したものである。
2. 'eroticism' という語の深い詮索は本稿の目的ではない。Webster's Third New International Dictionary の定義 'the arousal of or the attempt to arouse sexual feeling by means of suggestion, symbolism, or allusion in an art form' にて足るものとする。
3. 以下作品からの引用は Macmillan の The Greenwood Edition に依る。数字は全て作品の頁数。
4. (a) ... he had nothing square or practical about his look, much that was curvilinear and *sensuous*. (p.111)
 (b) He himself was full of vague latter-day glooms and popular melancholies.... (p.111)
 (c) Though *sensuous* [*selfish*], and, superficially at least, infested with the self-indulgent vices of artificial society.... (p.129) (イタリックス体筆者。以下同断。)
 (c) の引用文中の 'sensuous' は Macmillan の旧 Pocket Edition では 'selfish' となっている。Hardy がわざわざ 'sensuous' と書き改めたことは注目してよい。なおこの語は、OED には 'Apparently invented by Milton, to avoid certain associations of the existing word *sensual*,...' とあるが、この短篇では OED が 3 として挙げている 'Readily affected by the senses; keenly alive to the pleasures of sensation' 即ち *sensual* に近い意味に解するのが妥当である。
5. Their faces were within a few inches of each other, his breath fanned her cheek as well as Anna's.... Mrs. Harnham then felt a man's hand clasping her fingers.... What prompted her to refrain from undeceiving him she could hardly tell. Not content with holding the hand, he playfully slipped two of his fingers inside her glove, against her palm.... The thought that he was several years her junior produced a reasonless sigh. (p.116)

6. Edith Harnham led a lonely life. . . she had consented to marry. . . to find afterwards that she had made a mistake. That contract had left her still *a woman whose deeper nature had never been stirred*. (p.125)
7. (a) The luxury of writing to him what would be known to no consciousness but his was great, and she had indulged herself therein. (p.125)
- (b) . . . the man being one for whom, mainly through the sympathies involved in playing this part, she secretly cherished a predilection, subtle and imaginative truly, but strong and absorbing. . . Throughout this correspondence . . . the high-strung Edith Harnham lived in the *ecstasy of fancy*, the vicarious intimacy engendered, such a flow of passionateness as was never exceeded. (p.128)
8. She put up her mouth, and he kissed her long. . . Edith travelled back to Melchester that day with a face that showed the very stupor of grief, her lips still tingling from the desperate pressure of his kiss. (p.136)
9. (a) . . . she had closed with William. . . She came to some vague conclusions, and since then had kept her heart alive by pitying her proprietor's obtuseness and want of refinement, pitying herself, and letting off her delicate and ethereal emotions in imaginative occupations, day-dreams, and night-sighs. . . (p.4)
- (b) Though so *immature in nature*, she was entering on that tract of life in which emotional women begin to suspect that last love may be stronger than first love . . . (p.15)
- (b) のイタリックス体の部分と注6のイタリックス体の部分とを比較されたい。
10. p. 4.
11. p.12.
12. . . . when she was reclining on the pillow she re-read those of Robert Trewe's verses. . . it seemed as if his very breath, warm and loving, fanned her cheeks from those walls, walls that had surrounded his head times and times as they surrounded her own now. . . And now her hair was dragging where his arm had lain when he secured the fugitive fancies; she was sleeping on a poet's lips, immersed in the very essence of him, permeated by his spirit as by an ether. (pp.16-17)
13. ' . . I thought you [William] had been unkind; that you had neglected me; that you weren't up to my intellectual level, while he was, and

far above it. I wanted a fuller appreciator, perhaps, rather than another lover —' (p.30)

14. Personally he was not ill-favoured, though rather un-English, his complexion being a rich olive, his rank hair dark and rather clammy —made still clammier by secret ointments, which, when he came fresh to a party, caused him to smell like 'boys'-love' (southernwood) steeped in lamp-oil. On occasion he wore curls—a double row — running almost horizontally around his head. (p.166)
15. Then matters changed for Car'line. A tremor quickened itself to life in her, and her hand so shook that she could hardly set down her glass. It was not the dance nor the dancers, but the notes of that old violin which thrilled the London wife, these having still all the witchery that she had so well known of yore, and under which she had used to lose her power of independent will. (pp.179-180)
16. 本稿の趣旨とは直接関係はないが、'The Fiddler of the Reels' には "his [Wat's] acoustic *magnetism*" (p.182), 'An Imaginative Woman' には "the *magnetic* attraction" (p.11), 'On the Western Circuit' には "a *magnetic* reciprocity" (p.125) とある。
17. Suddenly Car'line sank staggering to the floor; and rolling over on her face, prone she remained. Mop's fiddle thereupon emitted an elfin shriek of finality (p.183)
18. fiddle にはスラングとして次の意味がある。
fiddle: n. The female pudend from ca. 1800.
v. (In C.19-20, gen. with adv. *about*) to play about intimately with, to caress familiarly, a woman.
(A Dictionary of Slang and Unconventional English, by Eric Partridge.)